

12月6日ゼミは開催します

天智天皇の時代

—12月6日ゼミ要旨：永井輝雄会員記—

私は、2025年3月1日に「5世紀から7世紀にかけての朝鮮半島と倭国の交流」というテーマで話をさせていただきました。その最後の部分—白村江の戦以降の倭国の説明—が尻切れトンボのようになってしまったので、今回改めて「天智天皇の時代」というテーマで話をさせていただきますと思っています。一部繰り返しになる部分もあると思いますが、お許してください。

それから、今回の『天智天皇の時代』は、前回にも名前を出したと思いますが、中村修也氏の『天智朝と東アジア』（NHK出版、2015年）の影響を強く受けています。同時期に出版された森公章氏の『天智天皇』（吉川弘文館、2016年）と比べると、歴史のとらえ方が全く違うことがよくわかります。

今回初めて『日本書紀』（小学館版、読み下し文と現代語訳）を繰り返し読んで感じたことは、『日本書紀』は、白村江で唐に負けた時から天智死亡の時まで、特に、天智8年から10年までは、唐の羈縻政策については、極力記載しない方針がとられているように思いました。

外交交渉が行われたことは記載されていても、何がどう決まったかはわかりません。唐に使節を派遣したことは記載されていても、何の目的の使節かが記載されていません。唐から2000人の人がやって来ても、何の目的でやって来たかがはっきりしません。書かれていないのは、書きたくない事情があったからだと思います。短い期間であっても他国の支配下にあったということは、できれば歴史事実として残したくなか

ったのではないかと、『日本書紀』の編纂者たちは、その間の出来事をあいまいに、あるいはどちらとでも取れるように、文章を書いたのではないかと考えています。その事情が、唐や朝鮮の書物から事情が判明することもあります、推測にゆだねざるを得ないこともあります。

また、天智が死亡し、唐の占領軍が半島に引き上げたことが、壬申の乱に繋がったのではないかと私は思いました。天智天皇の近江朝は、天智3年以来、唐の羈縻政策に従ってきましたが、672（天武元）年5月30日の郭務悰らの倭国引き上げは、大海人皇子にとって絶好の機会でした。6月22日大海人皇子は行動を起こしました。壬申の乱の勃発です。そして、それが天武・持統朝の日本の律令制確立に繋がり、その後の日本が大きく発展したのではないかと思いました（考証は足りませんが）。

なお、私は、①防人・烽火 ②水城の問題については、言及しておりません。『日本書紀』664（天智3）年この歳条、「対馬島・壱岐島・筑紫国らに、防と烽火を置く。また、筑紫に、天璽を築き水を貯え、名付けて水城という」の部分です。この文には、主語が書かれていません。これまでは、この文の主語は、当然、倭国の為政者（天智）で、①防人・烽火 ②水城は、唐・新羅の連合軍が攻めてくるのを防ぐためのものと考えられてきたと思いますが、4万人の将兵の大部分が祖国に帰還しないときに、そんなことを企てることできるかという疑念が湧きます。中村修也氏は、主語は唐と考えているようです。①防人・烽火は唐が朝鮮半島南部と倭国の連絡用に運用した通信システムであり、②の水城は、今後、唐から筑紫（那津）にやって来る官人・将兵を、南から攻めてくる倭人から守るための

施設ではないかと考えているようです。いずれにせよ、私には、この問題をあれこれというだけの力がありませんので、言及しておりません。以上。

ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。
- 3、会場への入場は、受付以外の方は13時頃にお願ひします。

山本五十六のこと

一山腰 直仁会員記一

山本五十六という人物について、今の若い人達はどの程度知っているのだろうか。

小生 商社に就職し、最初に行った海外は、インドネシアのスラウエシ島(旧セレベス島)であった。それは当時、飼料原料輸入業務を行っていた関係で農業開発調査のための1ヶ月足らずの出張であった。その時案内してくれた現地人から、私を日本人とみて、山本五十六という人は立派な人だったと話しかけられ、ビックリした。当時、まだ戦後10数年の頃で、日本の戦争責任批判が盛んであった時期だ。現在でも中国・朝鮮からは非難が続いているが、その理由は私なりに理解している。日本は古代、中国から全ての文化を吸収して文化を備えた国になった。律令制然り、文化の基礎となる文字も。そして仏教などは朝鮮を経由して取り入れた。つまり古代日本にとって中国が親であり朝鮮は兄であったのである。その国々を侵略したのだから、その恨みは大きい。戦後日韓が国交回復し、大野伴睦という政治家が初めて韓国を訪問し演説した。日韓は兄弟の関係だと。この発言が物議をかもした。大野伴睦としては、朝鮮との歴史に疎く、また当時日本は高度成長の頂点にあり、一方韓国は朝鮮戦争直後で、その経済格差が大きかったため、日本が兄という認識から、そういう発言をしたのだろう。しかし韓国では、自分たちが兄という認識であったために事件となった。一方、東南アジアでは状況が違っていた。インドネシアではオランダの植民地であったため、そこに日本軍が進出しても、それはオランダから解放したと受け取られたのではないかと思う。それが親日的な発言につながったの

ではないかと思う。それにしても、インドネシアでもド田舎であるスラウエシ島で、山本五十六を知っており、また尊敬されていることを知り、驚愕した。

その山本五十六について、1昨年の文藝春秋5月号に掲載された昭和史研究家保坂正康の記事を中心に、以下紹介したい。

山本は類い希な軍事的才能とリーダーシップを持ち合わせた人物で、今なお人気が高い。「やってみせ、言って聞かせて させてみて 誉めてやらねば 人は動かじ」という山本の金言は、各界のリーダーに好んで引用される。

山本五十六は明治17(1884)年新潟県長岡市で、長岡藩の高野貞吉の子として生まれた。父が56歳の子であったため、五十六と名付けられた。山本は旧藩主の命により、戊辰戦争で途絶えた藩の名門・山本家を継ぐことになり、山本五十六となった。従い山本は賊軍の出身である。また妻も会津藩士の娘であり賊軍である。そういう出身もあり、また生家が貧乏なため、中学を卒業後官費で勉強できる海軍兵学校に進んだ。そして明治37年卒業後早くも戦争を体験する。ロシアのバルチック艦隊と戦う日本海海戦である。巡洋艦「日進」に少尉候補生として乗り込み、砲弾の爆発により左手指2本切断と足の負傷という重傷を負い、3ヶ月の入院を余儀なくされた。この経験はその後、指導者になった際の判断に、大きな影響を与えたものと考えられる。山本はその後海軍大学校を卒業し、ワシントン駐在武官としてアメリカに赴く。ハーバート大学に学び、またアメリカ政府要人と親交を重ね、今後の戦争は大艦巨砲主義ではなく航空戦力が中心になっていくことを見抜いていた。

明治維新後に陸軍と海軍が創設された際、海軍は薩摩閥が、陸軍は長州閥が中心となった。当初は「海主陸従」が大方針とされた。「専守防衛」の観点から島国の日本を守るには、海軍を充実させるべきであるという理念である。しかしその大方針は逆転する。きっかけは、不平士族等の反乱である。そして明治10年の西南戦争は半年以上にわたって政府を苦しめた。こうした内乱では陸軍が主役になり、陸軍大臣山縣有朋の主張もあり軍のあり方は「陸主海従」に移っていく。陸軍はドイツ式の兵制を模範とし、クレメンス・W・J・メッケル少佐を陸軍大学校で教育に当たらせた。海軍はイギリス式の兵

制を模範とし、アーチボルド・L・ダグラスを団長とするイギリス海軍顧問団により、海軍兵学校の教育に当たさせた。近代ヨーロッパ史では、ドイツと英米は宿敵であった。日本の陸海軍の分断される要因の一つがここにもある。さらに陸海軍の分断には、藩閥も影を落としている。陸軍は山縣、乃木希典、児玉源太郎、桂太郎などの長州閥が、海軍は山本権兵衛、東郷平八郎など薩摩閥が実権を握っていた。その中で賊軍出身の山本は異色の存在であり、その運命も翻弄される

明治天皇は軍人勅諭で軍人の政治関与を厳しく戒めていたが、陸軍は自らが政治の主体になろうとした。昭和3年関東軍の河本大作大佐の張作霖爆殺事件、昭和6年の板垣征四郎大佐と石原莞爾中佐の満州事変と暴走する。一方、海軍にも異変が起き始める。昭和5年ロンドン海軍軍縮条約をめぐり、条約順守を是とする対米協調派(条約派)と条約が定めた艦隊比率に反発する軍備拡大派(艦隊派)の対立が顕在化した。昭和8年から9年にかけて、艦隊派主導の人事が行われ条約派は粛清された。山本は辛くもこの粛清人事から免れた。それは、山本の才能と人望を誰しも認めていたからではないか。山本がその後、賊軍出身というハンデイキャップを負いながら、海軍次官・連合艦隊司令長官と昇進していくことから推察される。昭和11年山本が海軍次官に就任した頃、日独伊三国同盟が浮上してくる。陸軍は賛成、海軍は大臣米内光政・山本・井上成美が反対し一時立ち消えになったが、昭和14年第二次世界大戦が勃発すると、米内・山本・井上が異動して居なくなったこともあり、三国同盟は実現してしまった。山本は政治家や言論人などから「もしアメリカとの戦争になったら、勝算はどのくらいあるのか」と尋ねられ、山本の答えは一貫していた。「日本に勝つ見込みはない。日本の艦隊はそのようにはできていない」と。

昭和16年陸軍の南部仏印進駐でアメリカは激怒し、日本への石油を禁輸した。陸軍の読みが甘かった。日本は経済制裁解除を求めたが、アメリカは日本に中国からの撤兵を迫った。陸軍は頑としてこれを拒否する。遂には米英等との戦争を決意する。近衛文麿首相が山本に対米戦争のことを聞かれた際、こう答えている。「それは是非やれと言われれば半年や1年の間は随分暴れてご覧に入れる。然

しながら、2年3年となれば全く確信は持てぬ。三国条約が出来たのは致し方ないが、かくなりし上は日米戦争を回避するよう極力御努力願いたい」と。

昭和16年真珠湾攻撃に始まり、その後の連戦連勝により軍事指導者らは舞い上がり、戦争終結への落とし所を探ろうとしなかった。山本は戦争終結のため短期決戦を見据え、ミッドウエー沖海戦により米機動部隊を打撃し、そこで講和に持ち込むと考えた。しかし米軍側は日本の暗号を解読し、その狙いを把握した上で待ち構えていた。この作戦は失敗に終わった。この作戦不成功により、戦争終結はもはや山本の手の届かないものになった。山本は故郷の友人に「あと百日の間に小生の余命は全部すり減らす覚悟に御座候」との書簡を送っている。その頃の山本は、おそらく死に場所を求めているのではないか。昭和18年4月18日、幕僚からの危ない前線視察はやめて下さいという進言を振り切り、「危ない前線だからこそ行くのだ。幾多の将兵が前線で身を敵弾に晒して戦っているからこそ行くのだ」として護衛の零戦6機を従え、ラバウル基地を飛び立った。そして暗号解読をしていた米軍の待ち伏せにより、ブーゲンビル島で撃墜され戦死した。その死は、1ヶ月公表を伏せられた。享年 60歳 最終階級 元帥海軍大将 以上。

投稿文を募集します

古代史ニュースに掲載する投稿文を募集します。投稿文は会員の皆さんの自由な意見の場です。初めての方も大歓迎です。

内容は、ゼミ講演での感想や意見、感銘を受けた体験や読書の感想、旅行先での新しい発見、内外の世相に関する意見、皆さんの思い出等を自由に記載して下さい。

投稿文によって、新知見を共有し、会員間の交流を深めたいと思います。

多くの会員の紙上参加を期待します。以上。

次回 1月10日ゼミ・テーマ

古代国家の成立

— 律令国家から王朝国家 —

齊藤 潔 会員

本号は3頁です。 以上

